

林文子先生を偲んで

ねえさん

林 誠太

ねえさんは長女で、末っ子の私とは年齢が離れていたせいもあって、ねえさんと言うより母親代わりであり、やさしい教師でもありました。

日常の家事万端なども完全主義と言っていい程丁寧な手解きのお陰で、現在の私も家の中の細かい仕事が苦になりません。

四十年程前、私が初めて下宿生活をするようになった時、二人で打ち直しの綿を真綿で覆い、布団を仕立て直したことをつい昨日のこのように思い出します。ねえさんは自分のスーツなども女学校時代のノートをみて器用に縫い上げたものです。私の中学生時代の父兄会に父の代わりに出席し、大勢の父兄に混じっていた時も、手製の白いブラウスと紺のスカートという地味な装いでしたが、その清楚さが、内心誇らしくさえ思えたものでした。

その反面、中古のセスナ機を共同で購入し、子供時代を過ごした津島と逗子の家の上空を経由して北海道まで操縦して驚かせたり、思い切りのよい、活発さもあって、あの世代の女性としては行動力に富んでいたと思います。

身体は小柄なのですが、いつもボリュームたっぷりの料理を作ってくれました。月二度、逗子でのおさまりのステーキも簡単な味付けでしたが美味しく、今後はそんな手料理も味わえない寂しさが続くでしょう。

亡くなる少し前のある日、昔を思いだしながら「わたしは子供の頃、ほんとに痩せこけていたのね、おぶさった妹の顔の方が大きいとみんなに言われたもの」と、その妹が重くて辛かったのか、私に向かって「あんたは泣かないでよく眠る、おとなしい子でよかった」とも。あとにもさきにも、これがたった一度の私への褒め言葉でした。とりとめのない思い出を綴りましたが、何処からか「もう、やめときよし」とねえさんの声が聞こえそうです。

(健康文化振興財団副理事長)